様 式 Ｃ－７－１

平成２１年度科学研究費補助金実績報告書（研究実績報告書）

1. 機 関 番 号 ３２６９２　　2. 研究機関名 東京工科大学

3. 研 究 種 目 名 基盤研究（C）　　4. 研究期間 平 成 ２１年 度 ～ 平 成 ２５年 度

5. 課 題 番 号 ２１５３０９９５

6. 研 究 課 題 名 音楽構成要素の分解と再構築による聴音課題作成とその教育効果に関する研究

7. 研 究 代 表 者

研 究 者 番 号	研 究 代 表 者 名	所 属 部 局 名	職 名
９０３８６７７２	ﾌﾘｶﾞﾅ イトウ ケンイチロウ 伊藤 謙一郎	メディア学部	准教授

8. 研究分担者（所属研究機関名については、研究代表者の所属研究機関と異なる場合のみ記入すること。）

研 究 者 番 号	研 究 分 担 者 名	所属研究機関名・部局名	職 名
	ﾌﾘｶﾞﾅ		
	ﾌﾘｶﾞﾅ		
	ﾌﾘｶﾞﾅ		
	ﾌﾘｶﾞﾅ		
	ﾌﾘｶﾞﾅ		

9. 研究実績の概要

下欄には、当該年度に実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、交付申請書に記載した「研究の目的」、「研究実施計画」に照らし、600 字～800 字で、できるだけ分かりやすく記述すること。また、国立情報学研究所でﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ化するため、図、ｸﾞﾗﾌ等は記載しないこと。

平成 21 年度の主な活動は、国内外で刊行されている聴音課題（単旋律のみ）のテキスト収集と、その整理・分析を計画していた。

聴音のテキストは、国内は 43 冊、海外はフランスで出版されている 70 冊を入手し、それぞれのテキストが掲げている教育目標と課題形態の確認を行った。その結果、国内のテキストは８小節を中心とした短い課題が多く、幼児・子供向けから音楽大学受験生を対象としたものまで多岐にわたり、示されている指導方法も著者によってさまざまであることが把握できた。その一方、フランスのテキストは、２小節単位で８つのブロックに分けた１６小節の課題を中心とし、それは初学者を対象とした比較的易しいレヴェルのテキストにも見受けられたのは意外であった。また、楽曲形式や特定の音楽様式、ハーモニーを意識した課題が多く、単に旋律を聴き取るだけでなく、テキストに付属のカセットテープやＣＤに収録された楽器演奏（音色）の聴き取りといったかなり実践的な課題が用意されているのも、国内のテキストにはあまり見られない注目すべき点である。

これは、フランスでは「フォルマシオン・ミュジカル」という、「聴音」や「視唱」といった元来の意味でのソルフェージュのほか音楽理論や音楽史も含めた「総合的なソルフェージュ教育」を重視し、国として教育の指針を定めていることが影響していると思われる。日本では、音高やリズムの弁別に意識が向けられているのに対し、さらに広く音楽を捉えようとする姿勢がフランスのテキストから読み取れることから、研究計画時に考えていた分析方法を一律に適用するのは、無理が生じる可能性がある。

テキスト収集が思いのほか手間取ったことに加え、上述の分析方法の再検討に時間を要したため、課題の分析作業は当初の予定から遅れている。しかし、分析方法の目途が立ったので、平成 22 年度中に分析を終わらせ、データ化まで作業を進める見通しである。

10. キーワード

(1) 聴音課題　(2) ソルフェージュ　(3) フォルマシオン・ミュジカル
(4) 音楽構成要素による分析　(5)　(6)
(7)　(8)

（裏面に続く）

11.研究発表（平成２１年度の研究成果）

〔雑誌論文〕　計（　０）件　　うち査読付論文　計（０）件

著　者　名	論　文　標　題			
雑　誌　名	査読の有無	巻	発 行 年	最初と最後の頁
			｜ ｜ ｜	

著　者　名	論　文　標　題			
雑　誌　名	査読の有無	巻	発 行 年	最初と最後の頁
			｜ ｜ ｜	

著　者　名	論　文　標　題			
雑　誌　名	査読の有無	巻	発 行 年	最初と最後の頁
			｜ ｜ ｜	

〔学会発表〕計（　０）件　　うち招待講演　計（０）件

発　表　者　名	発　表　標　題	
学　会　等　名	発表年月日	発　表　場　所

〔図　書〕　計（　０）件

著　者　名	出　版　社	
書　　名	発 行 年	総ページ数
	｜ ｜ ｜	

12. 研究成果による産業財産権の出願・取得状況

〔出　願〕　　計（　０）件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	出願年月日	国内・外国の別

〔取　得〕　　計（　０）件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	取得年月日	国内・外国の別

13. 備考

※　研究者又は所属研究機関が作成した研究内容又は研究成果に関するｗｅｂページがある場合は、ＵＲＬを記載すること。